

## 「郡道」をゆく(続3)

「郡道」について調べていくと、新しく知ること、意外な事実も多く面白い。「続続」と続けていくと本当に「ゾクゾク」してくるので、今回からタイトルを(続3)のようにする。今回は「郡道」をゆくバス、「郡道バス」に焦点をあてたい。『瑞穂区誌』『昭和区誌』から歴史をたどっていこう。

あの狭い「郡道」にバスが走っていた時代もあった。大正12年(1923)、名古屋市街自動車合資会社がT型フォード5台を改良して、名古屋駅~千種間、大津町1丁目~熱田伝馬町間に乗合バスを走らせたのが名古屋市内バスの始まりとなった。名古屋市営バスが登場したのは、昭和5年(1930)のことであった。満州事変前年であり、名古屋の都市化(郊外化)が進んだ頃である。「郡道」には、昭和6年11月、大津町~吹上~井戸田間を最初に、昭和12年8月までに6系統が走った。新三河鉄道が経営する乗合バスも、矢場町~吹上~呼読間で走っていた。昭和区内のバス系統のかなりの部分は、昭和7年に名古屋市が買収した新三河鉄道の経営する乗り合いバスと競合していた。

「郡道」を走るバスは多かった。

昭和36年(1961)、車両制限令が公布された。この政令は、大型のバスやトラックにより、道路がこわされたり、通行人や沿道の民家に危険が及ぶのを防ぐ目的で設けられた。しかし、基準に合わない不完全道路が全国で8000キロもあったため、バス



については、3年間の猶予期間がつけられたが、昭和41年(1966)8月から実施されることになった。写真は滝子通りの狭い道、「郡道」を走るバスである。「郡道バス」として親しまれてきた、栄町~南分町、栄町~丹八山田系統の昭和区吹上から瑞穂区大喜までが、この車両制限令に抵触することになった。ここに配車していた、車体の小さなバスも古くなったため、この部分の路線を変更したのである。

なお名古屋の市内電車が市営になったのは、大正11年(1922)である。当時の電車運転系統図を見ると、「市内未成線」として東郊線と千種郡道線が示されている。「郡道」は電車を通すには狭すぎたので、未着工に終わった。戦災を免れた街並みは、大正や昭和初期のおもかげをよく残している。もしこの道筋が拡幅整備されていたら、郡道の名は消えてしまっていたであろうと、『昭和区誌』は述べている。

(2015年3月30日)